

## 第3章 さくら市の生涯学習の基本理念

### 第1節 生涯学習についての体系的理解

生涯学習が重要だと言われて久しくなりました。ラングランが1965（昭和40）年にユネスコで「生涯教育」についてのアイデアを公式に発表して、日本にも「生涯学習」という言葉が広がり、相当な市民権を得ました。しかし、全国的に見て、生涯学習に対する行政支援の意義がわかりにくくなってしまっているという問題点が出てきています。

そして、こうした状況が生じてしまうもっとも根本的な原因は、「生涯学習とは何か？」が曖昧で漠然としているからだということも明らかになってきました。実際問題として、生涯学習に関する理解が、市民によって全く異なってしまいうことも多いようです。市では、この点を強く自覚し、生涯学習に対する体系的理解を前提として、行政支援のあり方を探ることにします。

#### 1 今、なぜ生涯学習か

生涯学習とは、この言葉の中に「生涯」という用語が含まれていることからわかるように、生まれてから死ぬまでの一生涯にわたる学習のことを指す非常に幅広い概念です。そこには、学校だけでなく、家庭・地域・職場など、あらゆるところで行われる学習活動や、文化・芸術、スポーツ・レクリエーション、趣味・娯楽、ボランティア活動など様々な活動が含まれます。

生涯学習と言った場合、学校を卒業してしばらくの間を経た大人の学習活動に焦点が当たることが多いのですが、当然のことながら学校で行う学習活動も含まれます。とはいえ、「教育を受けさせられる」という発想よりもむしろ、一人ひとりの市民が自発的かつ主体的に、さらには生きがいをもって楽しみや喜びを感じながら進めていくような生涯学習の在り方が非常に重要だと考えられます。

様々な理由から「生涯学習の重要性」が提案されますが、「個人が生涯学習を行うこと」と「一人ひとりが生涯学習を行えるよう社会的に支援すること」との双方を見すえ、そのことが必要であるだけでなく、個人的にも社会的にも有効だということを確認することが大切です。

##### （1）生涯学習の必要性

今、なぜ、生涯学習への注目と期待が集まっているのでしょうか。生涯学習が必要となってきた理由を一言で言うならば、現代社会が変化し続け、その変化のスピードも加速度を増してきていることです。たとえば、情報化・国際化・高齢化・科学技術の高度化・価値観の多様化といったことなどが社会的背景として指摘されます。加えて、現代社会では、その変化の方向性が不確定で予想がつきにくくなっていますし、それどころか、大きな災害など、従来の常識をはるかに超えた事態も生じる時代に突入しました。

かつては、変化の方向性がある程度まで予測できたので、学習すべき内容もある程度まで予想が付きました。しかし、現在では、学習する内容まで、その都度その都度構想し直していかなければならなくなっています。そのため、今までの社会においては、人生の初期の時期、つまり学校時代に得た知識や経験だけで、その後の人生において十分に通用していた事柄についても、変化の激しい社会に

なってからは、常に新しい知識や教養を身につけたり、新しい価値観に対応した生き方を学んでいったりすることが必要とされてきます。まして、高齢化し続ける社会においては、学校が終わってからの人生が非常に長くなっているため、知識や技能・経験といったものだけでなく、生き方まで含めて生涯にわたって学び直し続けることが要請されてきています。

他方で、このような受け身の理由からではなく、学ぶ中に喜びを見いだすなど、積極的に自分自身の生きがいを創造していくために生涯学習に打ち込む人が増えているという事実もあります。生涯学習に参加することがそのまま喜びや楽しみとなって、いきいきと様々な活動を展開している人がいます。また、生涯学習を通じて「まちづくり」を進めていったり、従来の学校教育ではなし得なかった真の教育に迫る方策として生涯学習に期待したりする動きがあるなど、新しい時代を切り拓く切り札としての関心も高まっています。

## (2) 生涯学習振興の有効性

生涯学習は、個人だけの問題として把握するのでは、その有効性は十分に理解されません。生涯学習を社会的に振興することに意味があります。どのような点で「生涯学習振興」が有効かを確認しておきましょう。

第一に、生涯学習が地域社会で盛んになることは、地域の知的資産を増やすこととなります。子どもだけでなく大人も積極的に学習活動に打ち込み、市民の知識・技能や経験などが豊かになることは、地域全体の知的な意味での財産を豊かにすることです。結果的には、顕在的・潜在的に地域の底力が高まっていくと言えるでしょう。

第二に、学びを通じて、人と人とのつながりが豊かになります。人と人とのつながりが豊かになれば、地域コミュニティは質的な意味で豊かになりますし、さらなる広がりを見せる可能性も高まります。生涯学習を振興することにより期待される成果の一つとして、コミュニティ振興効果があります。

第三に、学びが、生きがいや健康をもたらすこともあります。日々を漫然と過ごすよりも、何かの目標を持って学んでいくほうが、個人の健康状態には良い影響を与えるようです。健康な高齢者が増えることによって、結果的に医療費や介護費などの社会的負担が減っていくという可能性も指摘できます。



成人式

## 2 「教育者」基点から「学習者」基点の教育論へ

これまではあまり意識されていませんでしたが、生涯学習を振興する側に立てば、「教育」と「学習」とを区別することが必要な場面が頻繁に出てきます。そのときの発想法として、「教育者＝教育する主体」と「学習者＝学習する主体」との区別に置き換えて考えることが有益です。

生涯学習といった場合、教育論を語る際の着眼点が変わります。つまり、「教育者」基点から「学習者」基点に切り替えることが必要だというわけです。

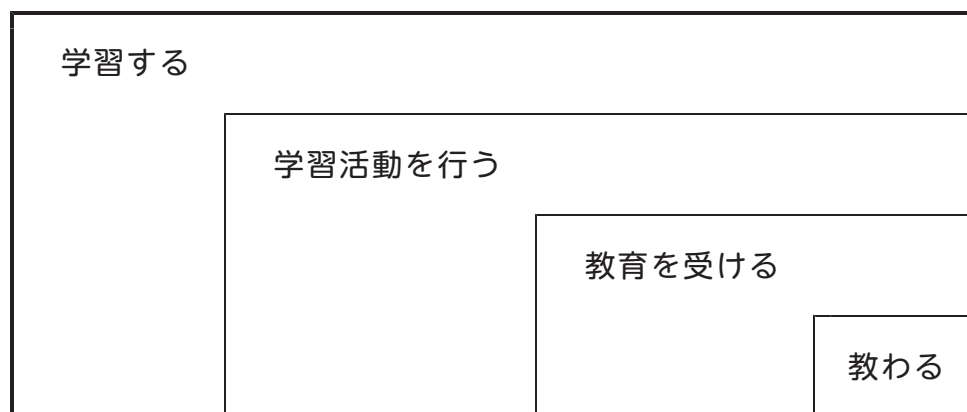
### (1) 「教育」と「学習」

教育関係において「学習者」を基点とする考え方を展開します。その際に、「学習」と「学習活動」とを、用語として区別することに最初のポイントがあります。

たしかに、辞書的な意味での「学習」が、「経験によって新しい知識・技能・態度・行動傾向・認知様式などを習得すること」という意味があるのに加えて、「そのための活動」と定義されていることがあります。つまり、「学習」という日本語は、「学習活動」という意味合いも兼ねています。しかしながら、市民の生涯学習を支援する立場に立てば、「学習」と「学習活動」とについて、両者を自覚的に区別することを推奨いたします。というのは、「学習」は「結果」に力点が置かれた概念であるのに対して、「学習活動」では「学習のための活動」といった「目的」に焦点が当たるからです。すなわち、「学習活動」は、「<学習という結果>をもたらすための目的意識的な活動」だというわけです。

生涯学習の範囲として最も広いのは「学習」です。学習者は、「学習」を目的として「学習活動」を手段として選ぶことができます。次に、学習者は、「学習活動」を目的として「教育を受けること」を手段として選ぶことができます。さらに、学習者は、「教育を受けること」を目的として「教わること」を手段として選ぶことができます。

このように、学習者の営為について、全体を見ずえた「目的－手段」関係の連鎖として、「学習すること」・「学習活動を行うこと」・「教育を受けること」・「教わること」を、「学習」の位相の違いと捉えることができます。



【図表1-1】「学習すること」の具体的内訳

## (2) 「生涯教育」と「生涯学習」

生涯学習について計画化する際には、「生涯教育」と「生涯学習」との区別を意識しておく必要があります。この違いは、前者が「教育者」を基点にして発想されているのに対して、後者が「学習者」を基点にして言われた言葉だという点にあります。そして、学習者は、自発的・主体的に活動を行っている存在であることが原則になっています。

むろん、人によっては、「教育」という言葉から連想するイメージが、上から一方的に教え込まれたり何かをやらされたりするものであり、時に押しつけがましいものとしてしか思い浮かべられないために、「生涯教育」が好ましくないものを感じられてしまうこともあるようです。しかし、こうした強制的なイメージは、様々な教育のあり方の一つの方向性ではあっても、教育の姿の全体を覆い尽くすものではありません。それどころかむしろ、教育が「育てること」や「育むこと」こそが目的となっている考え方であり、「教えること」が手段に位置づくことを押さえれば、「教えこみ」以外の教育のやり方も豊富にあることに気づけます。

したがって、生涯学習が、市民一人ひとりが自発的かつ主体的に行うことを基本・基盤とした考え方であるとともに、「教育」という発想を否定した考え方では決してないことを再確認しておく必要があります。当然、「生涯教育」という言い方がなされた場合においても、「教育されなければならない」という義務が示されているわけではありません。「生涯教育を受けること」という言い方をしたとしても、市民に対して「教育される義務」が課されているのでは決してなく、市民の「教育を受けられる権利」を生涯にわたり保障しようとする考え方を示しています。生涯学習のやり方として、「教育を受ける」という選択肢が生涯にわたって残されていると考えることができます。

実際、以前から、「生涯教育」とは、「社会の様々な教育機能の相互の関連性」を考慮したような総合性を重視した「条件整備」のことを意味していました。1981（昭和56）年に出された中央教育審議会答申「生涯教育について」は、望ましい生涯学習のあり方として、「各人が自発的意思に基づいて行うことを基本とする」という観点を強調した上で、「この生涯学習のために、自ら学習する意欲と能力を養い、社会の様々な教育機能を相互の関連性を考慮しつつ総合的に整備・充実しようとするのが生涯教育の考え方である」と明確に言い切っています。つまり、「生涯教育」という言い方を行政がする際には、「生涯をつうじて教育すること」や「生涯にわたり教育を受けさせること」とか「生涯をかけて教えこむこと」といった、教育者側による具体的で能動的かつ積極的な働きかけとはほど遠い概念だとみなすべきです。

### 3 生涯学習の範囲

かなり世間一般に広まってしまっている誤解として、「生涯学習は、大人だけが関係するものだ」というものがあります。さらに、「生涯学習の主人公は高齢者だけだ」という誤解も、相当に広がっています。

たしかに、現在の日本で行われている生涯学習は、その主体として高齢者が多く、福祉分野では特に目立っているかもしれません。しかし、「生涯学習」という言葉が、「生涯」と「学習」という二つの単語で成り立っていることを考えると、「生涯」の意味を「高齢期」だけに限定するのは、そもそも論理的に無理があると言わざるをえません。よって、生涯学習の範囲について考える際には、「生涯」の意味が「生まれてから、人生を終えるまで」の長期間にわたることを改めて確認する必要があります。

#### (1) 「生涯をかけた学習」としての生涯学習

生涯学習は、「生涯にわたる学習」という意味が基本となります。言い換えれば、生涯学習といった場合、「生まれてから生を終えるまでの人生期間の全部」を漠然と指しながら、「学び」を把握することになります。そのため、生涯学習の概念については、個人の人生全体に拡散してしまい、焦点が絞りにくいという面があります。

他方で、「学び」を「生きること」の基軸にすえて、学習活動を一生涯をかけて自覚的に行う人もいます。そのような人にとっては、生涯学習は、「生涯にわたる学習」といった漫然としたものではなく、「生涯をかけた学習」というような、目的意識の強い営みになります。これは、個人のライフスタイルに関わる課題や目標だとみなせます。

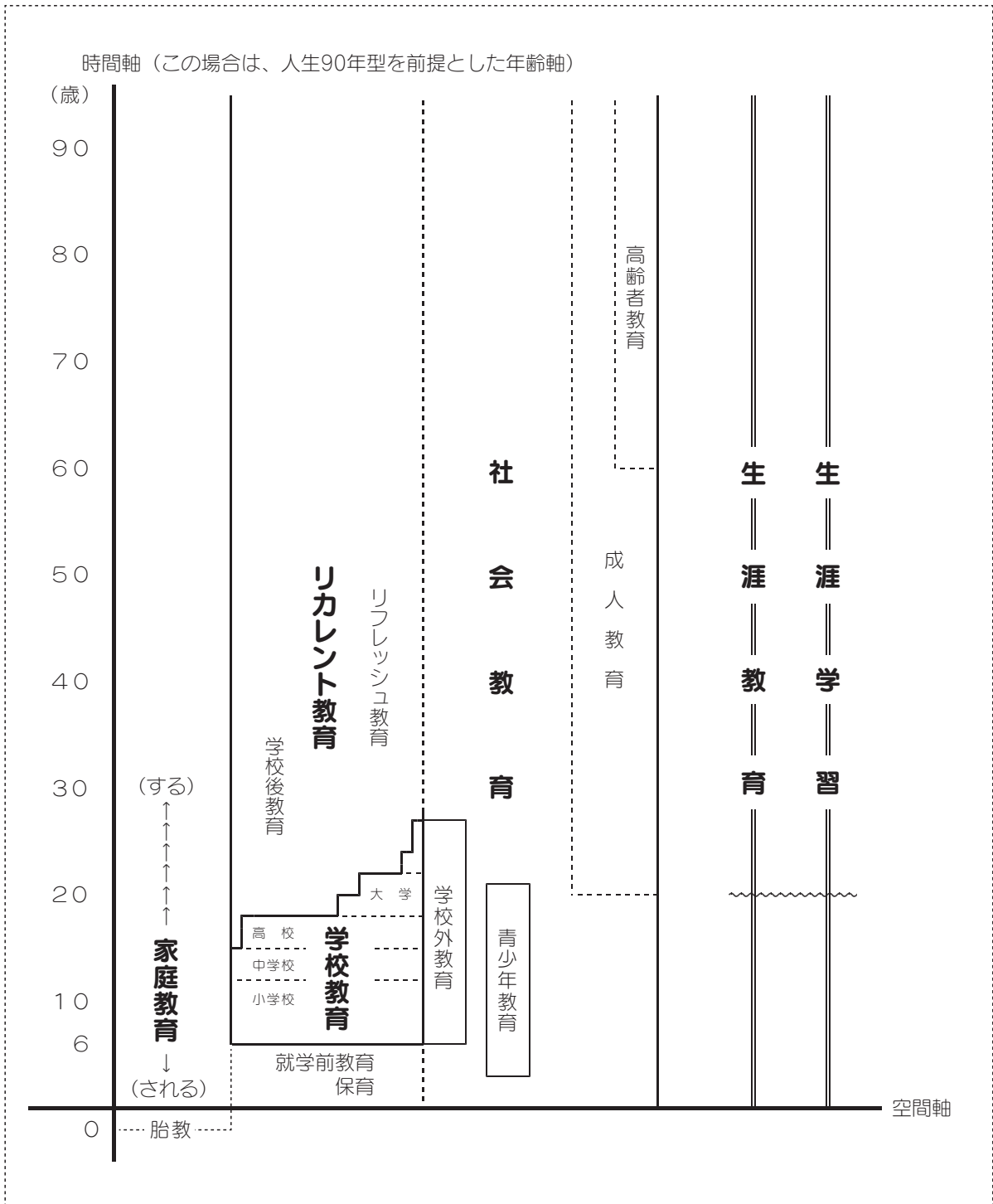
#### (2) 「生活全般にわたる学習」としての生涯学習

生涯学習は、実質的に個人の生活全般に広がります。その意味では、生涯学習は「生活全般にわたる学習」だという話になります。「生涯にわたる学習」や「生涯をかけた学習」が「生涯学習のタテの広がり」だとみなすならば、「生活全般にわたる学習」とは「生涯学習のヨコの広がり」だと言い換えることができます。生涯学習のテーマが、安全・安心から趣味・教養まで幅広く広がってしまうのも、当然の成り行きです。

#### (3) 家庭教育・学校教育・社会教育の統合

生涯教育及び生涯学習には、家庭で行われる教育・学習活動、学校で行われる教育・学習活動、地域社会などで行われる教育・学習活動、さらには各種のメディアの人間形成への作用なども含まれます。生涯教育とは、家庭教育・学校教育・社会教育といった教育の三つの領域を統合した考え方です。そして、生涯学習とは、こうした諸々の教育について、学習者側から見た場合の言い方です。

生涯教育に該当する分野とは、ほとんどあらゆる領域を含むと言ってよいほど様々な領域にまたがっていることが確認できます。そこで、社会教育を「社会で行われている教育」というように広く解釈するならば、その分野は非常に広範にわたっていて、交通安全・防災訓練及び医療・看護や保健・福祉などの様々な領域が含まれることになります。



【図表 1-2】教育・学習活動の空間的広がり

用語解説

※「リカレント教育」とは、学校教育を卒業・修了した後も、本人の必要や希望などに応じて、大学・短大などの高等教育機関を活用し、学び直しを進めるような教育・学習活動のことです。従来は、職業に関する学習内容が中心でした（これが「リフレッシュ教育」と言い換えられることもあります）が、内容も様々になり、大学の公開講座に参加したり、大学に社会人入学したりすることなどもリカレント教育に含まれます。

#### (4) 「生涯学習」と「社会教育」

生涯学習と社会教育とが同じものという誤解や、それらの区別が曖昧なままのことが多くあり、「生涯学習イコール社会教育」という考え方も普及しています。しかし、ここで改めて、社会教育があくまでも生涯教育の一部であることを確認する必要があります。

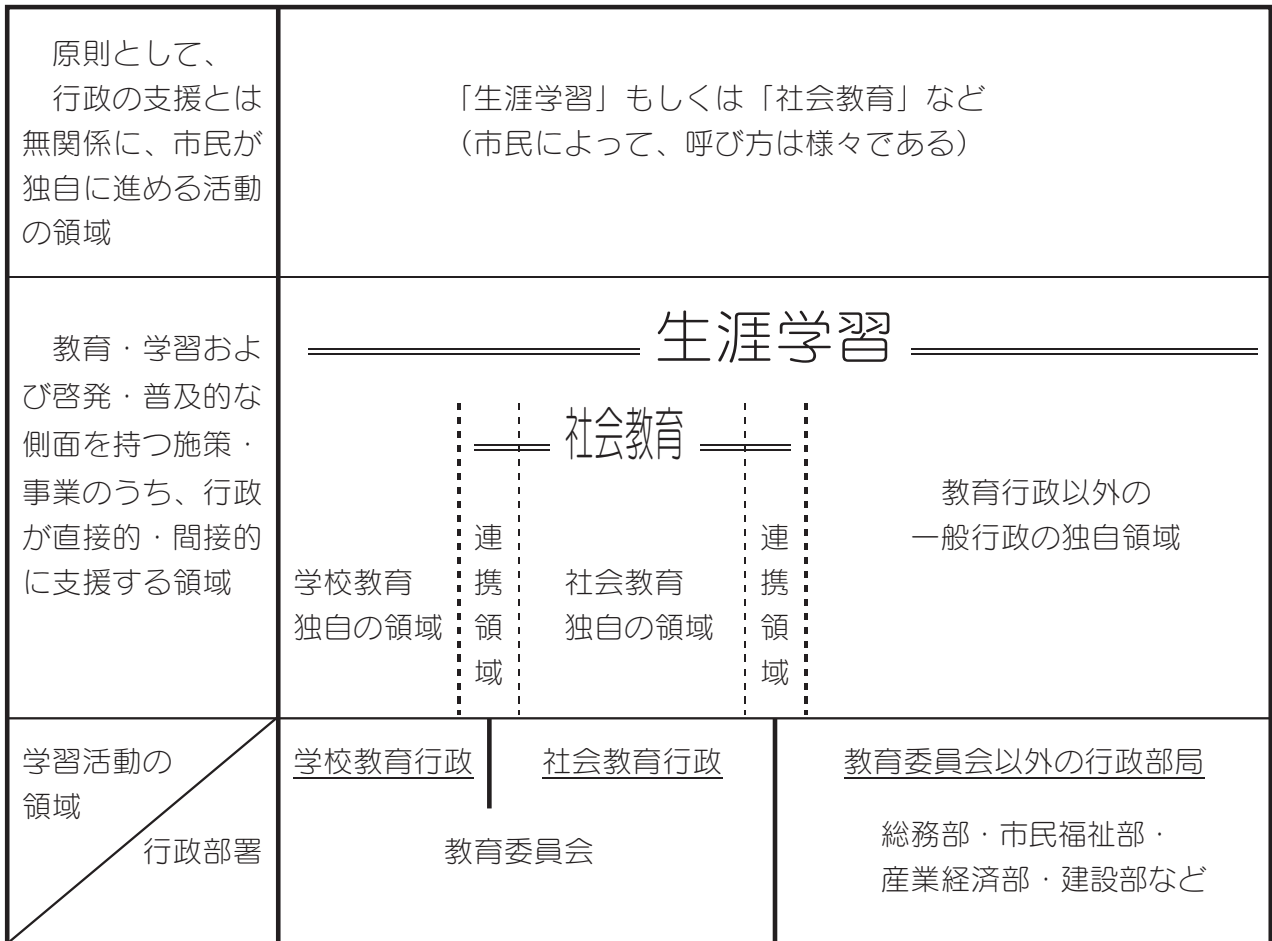
実際、社会教育は、生涯教育及び生涯学習の中の広範な領域を占めるだけでなく、「扇の要（かなめ）」かつ「羅針盤」として、非常に重要な意味をもっています。市民の活動レベルでは、社会教育活動が生涯学習活動の大部分を占めますし、それに応じて、行政レベルでは、社会教育行政が市民の生涯学習を支援する際の直接的で大きな範囲を実質的に担います。

また、「社会教育か、生涯学習か」というように二者択一的に捉える考え方もありますが、社会教育が生涯学習の部分を担っていることを考慮すると、それは適切ではありません。まして、「生涯学習をするから社会教育をしなくてよい」とか「生涯学習は社会教育を消滅させてしまう」と考えてしまうのであれば、理論的な意味でも実践的な意味でも様々な間違いが生じてしまいます。

ひるがえって、生涯学習と社会教育との関係は、とも倒れするか両立するかのどちらかだと考えるのが適切です。したがって、生涯学習が強調されるからといって、従来の社会教育を軽視してよいと言うわけでは決してありません。それどころか、むしろ逆に、生涯学習が重要になればなるほど、社会教育の意義や役割はより一層大きくなっていくことになります。



国際太鼓フェスティバル



【図表 1-3】生涯学習と社会教育との関係図



## 4 生涯学習の内容

生涯学習における学習内容や学習課題は、極めて多く多種多様なために一見整理不可能に見えますが、おおよそ次の三つのグループに分類して考えることができます。

- ① 生存確保課題＝「いのち」の根本を支える課題
- ② 生活向上課題＝「くらし」を質と量の両面で豊かにしようとする課題
- ③ 生きがい課題＝「ほこり」を自分自身に感じながら日々を過ごすための課題

これらの三つの課題は相互に関連しあっていますし、ある一つの学習活動に同時に三つの意味合いが含まれていることも少なくありませんが、市民一人ひとりが生涯学習を進めていく目的などを把握するための視点として有効です。

### (1) 生存確保課題

生存確保課題とは、人間が、自らの生命の維持や生存のために学ばなければならない内容に相当します。これは、学習する本人が自覚的・無自覚的とを問わず、生きることの根本・基盤に位置するものであり、抽象的にまとめてしまえば、「いのち」「生命」を軸としたものであり、「死なないための課題」もしくは「生き残るための課題」とも言えます。そこまで大げさな言い方でないとしても、「生きながらえるための課題」があります。

ここには、主として人間の健康や安全を維持したり創造していったりする課題が相当するでしょう。具体的には、病気等の予防や早期発見・治療、健康づくり・体力づくりなど、健康にかかわるものや、治安の維持・防犯・交通安全・消防・救急・防災対策などを通じて安全を確保するものなど、安心して生活を営むための課題が挙げられます。

### (2) 生活向上課題

生活向上課題とは、生きるか死ぬかという根本レベルとは言わないまでも、人間が快適さや便利さなどを求めて生きていく際に必要とされる内容に相当します。日常生活における様々な問題を解決したり、諸々の目標を達成したりするためには、何らかの学習活動が必要とされます。人が具体的に「生活」を営む中で学習を通じて解決・達成していくべき課題は、「生活」という言葉が広範囲にわたると同様に広範で多様です。

個人レベルに限っても、個人的なもの、また、家庭・家族や地域との関係、職業に関するもの、能力的な側面・人間関係の側面などから達成されるべきものなど、達成したいと望んでいるものは非常に多くあります。また、「地域課題」としても、人権・平和・福祉・環境・消費者など、いろいろの課題が挙げられますし、高齢化・国際化・高度情報化などの社会の急速な変化に主体的に対応するという意味でも、教育・学習活動は大切です。

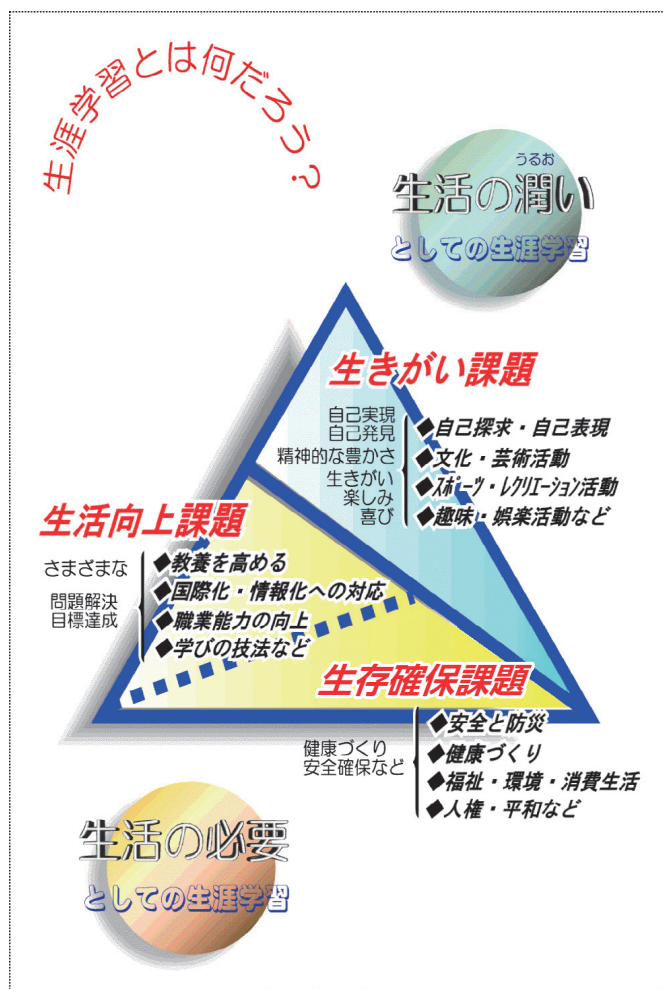
### (3) 生きがい課題

生きがい課題とは、生きがい及び生きる喜びを発見・創造することにより幸せを味わうことにつなげていくための学びの内容と言えます。現代日本に生きる人々の多くが物質的な面での豊かさに加え、精神的な面での豊かさを追求する傾向になり、個人個人の生きがいという問題が切実になってきています。特に、価値観が多様化してきた現代社会にあって、人々は自分らしい個性的な生きがいを発見

し創造したいと願っています。

生きがい課題を達成するチャンスは、学習していること自体が楽しみ・喜びとなるとき、学習活動を通じて問題解決・目標達成を成就させるとき、人と人との交流により豊かな人間関係が創造され、感動したり、自分自身が生き生きと輝くことができる機会が生まれてくるときなど、生涯学習活動のあらゆる局面に見出したりすることができます。また、学習活動の成果を社会に還元し、それによって自己充実感を得たり、自分自身の存在価値が承認・評価されたりするときにも、生きがいを実感できます。生きがい課題の達成のためには、学びの成果を自分の中だけに閉じこめずに、家庭や職場や地域などに広げ、還元していくことも大切であり、「活躍」という形で外に発揮することが望まれます。

なお、生涯学習においては、生きがいは重要なキーワードですが、「生きがいを得られる学習だけが生涯学習である」と考えてしまえば、それは部分的にしか正しくありません。しかし同時に、学習活動を進めていく原動力もしくは目標として「よろこび」や「生きがい」が大きな役割を果たしていることを自覚することも、生きがい課題を充足することを考える上で大切なこととなります。



【図表 1-4】生涯学習の課題を構造的に示した三角形

#### 用語解説

※「生活の必要としての生涯学習」の内容（①生存確保課題、②生活向上課題）を土台として、「生活の潤いとしての生涯学習」の内容（③生きがい課題）が展開していくことが一般的です。

## 5 生涯学習の形態

市民の行う生涯学習活動には様々な形があり、かつ、それらが複合的に組み合わさっているというのが実状ですが、その形態を、以下のように大きく三つのタイプに分類することができます。

① 入力（充電）型＝「学び」をつうじて意図的・結果的に自分自身を充実させる活動

② 出力（放電）型＝「学びの成果」や元々の能力・可能性などを発揮する活動

③ 交流型＝「学びあい」が意図的・結果的に促されていく相互交流の活動

ただし、これらの三つのタイプが常に密接に関連していることを意識しておく必要があります。

### （1）「入力（充電）型」の活動

一つ目は、講義を聞いたり、本を読むなどの方法を通じて知識や教養を身につけたり、反復練習などによって技能を習得したりしながら経験を積むような活動です。これは、いわば自分の中に情報・知識・技能や経験などを入力していくタイプの「入力型」のもので、一般に「学習」と言われるものの典型です。この入力型の活動は、自分の中を外から充電して自らを豊かにしていく「充電型」の活動と言い換えることもできるでしょう。

### （2）「出力（放電）型」の活動

二つ目は、知識・技能・能力や経験など、自分の中に蓄積された様々な形の学習成果を外に向かって発揮する「出力型」の活動です。これは、「充電型」の活動に対して「放電型」の活動と言えます。このタイプには、自分が精魂を込めて作った作品についての発表機会をもったり、大人数の前で発言したり、少人数の話し合いの中で自己表現したりするような活動が含まれます。また、ボランティア活動などを通じて積極的に社会貢献することなども、出力・放電型の中でも特に「活躍型」の生涯学習活動として、その重要性が高まっています。

こうした活動は、学習成果を発揮したいという欲求に基づいています。しかし、それは、それ単独の域にとどまらず、さらなる学習活動の充実に対する必要性を実感させるきっかけにもなっています。比喩的な言い方をすれば、充電が蓄積していけば、放電したいという欲求が高まってきます。逆に、放電しようと試みれば、充電の不十分さを自覚できます。充電の不十分さを自覚すれば、学習しようという気になります。こうして、出力・放電型の活動は、よりいっそう学習活動を促進させ拡張させていこうとする原動力になります。

### (3) 「交流型」の活動

三つ目は、人々が交流し合う中で様々なことを学んでいく「交流型」の活動です。学習らしい学習を意図的に行っているわけでもなく、学習しようという強い意識がなくとも、人間は、様々な人と出会い、ふれあう中で、互いに学びあうことができます。

また、人間どうしがふれあうこと自体が喜びにつながるという点に注目すると、交流型の活動は、いわば人間として生きる喜びを学んでいるものと言えるでしょう。

この「交流型」の活動は、人間との交流においてはもちろんのこと、動物や自然、モノや情報・環境などとの交流の中でも見いだすことができます。その点で、体験型や参加型の学習機会の中には、「交流型」の学習機会が豊富にあると言えます。

よって、個人を軸として捉えられる生涯学習には、社会的なつながり、さらには世界とのつながりというような広がりがあることが確認できます。



【図表1-5】生涯学習の形態（入力・出力・交流）

## 第2節 本計画の基本理念

さくら市では、平成 19（2007）年4月から平成 29（2017）年3月までの10年間をかけて「さくら市生涯学習推進計画～ゆめ さくら 学びプラン～」を実施してきました。そして、第2章で確認したように、計画実施の成果も相当に出ています。このたび、本計画の何を引き継いでいくか、何を新たに追加していくか等を意識し、第二次計画を構想いたします。

その際、「第2次さくら市総合計画」の「第2次基本構想」が平成 28（2016）年から平成 37（2025）年までの10年間にわたることに鑑み、さくら市の将来都市像として「安心して暮らせ、地域・ひと・ものを結ぶ、魅力いっぱいのみち」が提示されていることを踏まえ、生涯学習推進計画を実施することをつうじて、「地域・ひと・もの」が結ばれ、「みち」が魅力いっぱいになるよう創意工夫いたします。

### 1 第一次計画から引き継ぐ理念

#### (1) キャッチフレーズ「さくら咲き 夢さき 人さき 文化さく」の踏襲

第一次計画では、基本構想の理念を示すものとして、以下のキャッチフレーズが高らかに掲げられ、様々な場面で用いられました。

さくら咲き 夢さき 人さき 文化さく

ここで、「さくら咲き」は、本市の名称であり日本国のシンボルでもある桜が美しく咲き誇っている状況を指し示しているため、「さくら市らしさ」が感じられます。また、「さき、さく」といった平仮名表記に「咲く（開く）、策（対策）、幸（さいわい、繁栄）、先・前（将来・前途）」などの様々な意味が込められているため、第二次計画でも「生涯学習による“まち”づくり」が未来に向けて多彩に展開しうる余地が残されています。よって、「さくら咲き 夢さき 人さき 文化さく」については、そのまま踏襲いたします。

#### (2) メインテーマ「さくら市をもっと好きになろう」の発展的継承

第一次計画の実施を通じて、さくら市を好きな人が増えたとともに、もっと好きになった人も増えたとみなせます。そこで、メインテーマについて、以下のように変更します。

「さくら市をもっと好きになろう」（第一次）から  
「大好きなさくら市をもっと育もう」（第二次）へ

ここでは、すでに大好きな状態と化した「まち」に対しては、「人工的に作る」という言い方よりも「自然な形で育む」という言い方のほうがふさわしいとみなしています。また、さくら市を好きになるよう教育などにより働きかけるという立場よりも、「自ずと好きになれるようなさくら市」を創造・継承させていくという考え方を優先します。

### (3) 計画の通称「ゆめ さくら 学びプラン」の発展的継承

第一次計画の通称は、「ゆめ さくら 学びプラン」でした。この計画を実施した10年間をつうじて、「さくら市を好きになる人が増え、中には大好きな人が出てくる」という「ゆめ」は、かなり叶ったとみなせます。次の段階としては、生涯学習をつうじて、ハード面とソフト面との双方を見ずえて、さくら市をいっそう育むことが重要だと考えます。

#### 「ゆめ さくら 学びプラン」(第一次) から 「さくら 育み 学びあいプラン」(第二次) へ

第二次計画では、「学び」ではなく「学びあい」という言葉を用いています。これは、個々人が各々のペースで「学び」を進めることが大切だということを念頭に置きながらも、複数の人が互いに学びあう機会を持つことによって、さくら市がいっそう育まれていくのではないかと期待が込められています。つまり、「学びあう機会をつうじて、互いの交流を広げたり深めたりすること」や「互いに交流しながら、個々の学びを広げたり深めたりすること」の価値および有効性を念頭に置いて、キーワードを「学び」から「学びあい」へと発展させたのです。



青少年センター「あいさつ巡回活動」

## 2 第二次計画において新設する理念

第二次計画は、基本理念のレベルでは、第一次計画を継承することを基本とします。しかし他方で、さくら市の未来を創造するにふさわしい新しい理念も提案していきます。

### (1) 「育てる・育む」という視点から「まちづくり」の意味を問い直す

第2次さくら市総合計画では、「まちづくりの方向性」として、「①自立した行財政の確立、②まちづくりの基本は人づくり、③いきいきとした生活を楽しむまちづくり、④活力と魅力にあふれたまちづくり、⑤環境にやさしいまちづくり、⑥人口減少社会への対応・取り組み推進」の6本の柱を示しています。さくら市では、2本目の柱として「まちづくりの基本は人づくり」と宣言しているように、子どもに対する教育はもちろん、成人や高齢者なども含めて、生涯にわたって学ぶ意欲を持った人材を育成・養成することを重視しています。

ただし、「人づくり」という言い方それ自体に対して引っかかりを感じる市民もいます。実際、「人」に対して「つくる」という言い方を用いることが、操作的で人工的な印象を与え抵抗感があるという意見も出ています。「人」は、必ずしも計算・計画通りに造形できる存在ではなく、そこには難しさも面白さもあるというわけです。そこで、第二次計画では、「ひと」は、造られるというよりも育てられたり育まれたりするものだという立場を基本に置き、「ひと育て」や「ひと育み」という言葉を用いる場面を増やします。

さらに、一人ひとりの市民が生涯学習をつうじて「まちづくり」を進めることには、人を育てたり人間関係を豊かにしたりしてコミュニティづくりを促すという側面があるので、「工場でモノを作る」というよりも「生き物を育てる」という感覚のほうがよりじっくりくと感じる市民もいます。実際、対象とする「まち」について、「作る」とか「造る」という言い方をしただけでは、建築物や土地利用の仕方などといったハード面ばかりが思い浮かべられがちですが、「育てる」とか「育む」という言い方を当てると、ソフト面にも目が向き、人材育成はもちろん、地域内外の人間関係を豊かに発展させていくといった側面も「まちづくり」の極めて重要な要素だと気づくようです。言葉の綾に過ぎないかもしれませんが、「まちを<育てる>」とか「まちを<育む>」という用語法を提示し、「まち育て」や「まち育み」という造語を用いることが有効です。

そこで、第二次計画では、一般に言われる「人づくり、まちづくり」という表記を用いる場面を残しつつも、基本的に「ひと育て、まち育み」という言い方へと移行します。

「人づくり、まちづくり」(第一次) から  
「ひと育て、まち育み」(第二次) へ

ここでは、「ひと」には「<sup>そだ</sup>育てる」という表記を当て、「まち」には「<sup>ほぐ</sup>育む」という言い方を呼称させています。というのは、「育む」は、「育てる」よりも広い範囲を覆うというニュアンスが感じられ、「まち育み」には、ソフト面だけでなく、まさに「まち作り」や「まち造り」という言い方に相当するようなハード面も含まれるとみなすからです。

## (2) 「もったいない」を鍵として「学び」の価値を見直す

第2章で確認したように、さくら市は、市民による生涯学習活動が大変に盛んです。また、行政による条件整備も進んでおり、生涯学習関連施策に対する市民満足度も大変に高く、過去3回の調査（平成21・23・25年）で毎回1位でした。これは、第一次計画で、市民と行政とが協働して進めていく「生涯学習によるまちづくり」の成果の現れと言えます。

いずれにせよ、さくら市に在住・在勤する人は、さくら市の充実した環境を用いて生涯学習活動に参加しなければ「もったいない」と言えます。「学ばなければもったいない」のは、どの自治体であろうと共通しますが、さくら市では特に強調されてよいでしょう。

さらに、何かを学習したら、その成果を自己表現したり、ボランティア活動に活用したり、誰かに教えたりするなどして生かせば、学習成果がいつそう輝いてきます。まして、さくら市は、第2章で確認したように、ただ学習するだけにとどまらず、学習した成果を生かす仕組みを充実することに努めてきたという意味で、さくら市に在住・在勤する人にとっては、せっかく学んだことを決して無駄にせず、様々なやり方で生かす機会が豊富にあります。まさに「学ぶだけでももったいない」という環境が整っています。

以上のことを鑑みて、次のような標語を提案いたします。

**学ばなければ もったいない、  
学ぶだけでも もったいない**

今後、「学ばなければ もったいない、(なおかつ) 学ぶだけでも もったいない」というように、「学び」と「学びを生かすこと」との両方の大切さについて、より多くの市民が実感できるような生涯学習環境を充実させていきます。その際、「いつでも、どこでも、誰でも、何でも、どのようにでも」の観点を重視します。

## (3) 市民こそが主人公たる生涯学習

第一次計画から貫かれてきたことは、「生涯学習の主人公は市民である」という考え方です。実際、生涯学習関連施策の体系化においても、基本理念として、「さくら咲き 夢さき 人さき 文化さく」の実質を示す内容として、「私たちは行政と力をあわせて生涯学習による“まち”をつくります」という宣言文が明示されており、市民と行政とによる「協働のまちづくり」が着実に進められてきました。

第二次計画では、生涯学習による「まち育み」を、自己と他者との相互尊重の精神を基盤に置いて促進するために、「学びあい」と「生かしあい」という言葉を提案します。「学びあい」とは、市民どうし、市民と行政、行政どうしが互いに学びあうことであり、「生かしあい」とは、学習成果を様々な場面で相互に生かしあうことを意味しています。

**学ばなければ もったいない、学ぶだけでも もったいない。  
私たちは“学びあい”と“生かしあい”の“まち育み”を進めます。**

基本理念としては長いですが、この宣言文を、第二次計画の基軸に位置させます。ここで言う「私たち」には、行政のみならず市民も含まれていて、市民こそが主人公です。





## 「生涯をかけた学習」についての名言等

**ヒンズー教**  
「四住期」

学生期  
家住期  
林住期  
遊行期

**孔子**  
「論語」  
「為政」

吾十有五にして学に志し、  
三十にして立つ。  
四十にして惑はず、  
五十にして天命を知る。  
六十にして耳順ひ、  
七十にして  
心の欲する所に従ひて  
矩を踰えず。

**佐藤一斎**  
「言志四録」

少くして学べば、  
則ち壮にして為す有り。  
壮にして学べば、  
則ち老ゆとも衰へず。  
老いて学べば、  
則ち死すとも朽ちず。